

平成22年度 岩手県農業研究センター試験研究成果書

区分	指導	題名	若苗利用トマト抑制作型における適品種と栽植様式 および仕立て方等栽培管理方法	
[要約] 若苗利用トマト抑制作型では、品種「桃太郎サニー」が桃太郎系品種の中では商品果収量が多く優れる。また、株間45cm、マルチ穴12cm、仕立て方法は主枝2段摘心側枝1本仕立て、かん水開始時期は第1花房開花期とすることが有効である。				
キーワード	トマト	若苗	抑制作型	技術部園芸研究室

1 背景とねらい

トマトの抑制作型を慣行の雨よけ普通作型と組み合わせる場合、育苗の省力化が求められることからペーパーポット育苗直接定植が有効だが、若苗定植の特性上、草勢が強くなりやすく着果が不安定となることが課題である。

そこで本課題では、若苗直接定植を前提とした場合に安定した生育・収穫が可能となる適品種やかん水方法、草勢抑制技術などの栽培技術を確立する。

2 成果の内容

- (1) 品種は「桃太郎サニー」が、夏秋栽培向け桃太郎系品種の中では商品果収量が多く優れる(図1)。
- (2) 株間は、平均1果重及び商品果収量が多い45cmが最も優れる(図2)。
- (3) 草勢が強くなりやすい若苗定植では、マルチ穴を大きく開け、株元を乾燥させた方が初期収量が多い(図3)。
- (4) 主枝2段摘心側枝1本仕立てとした場合、初期収量では1本仕立てより劣るものの、9~10月の商品果収量が多く、総商品果収量でも優れる(図4)。
- (5) かん水開始時期は、第1花房開花期とした方が、それ以降に開始するよりも8月の商品果収量が多く、総商品果収量でも優れる(図5)。

3 成果活用上の留意事項

- (1) 本試験は1鉢寸法4.7×7.5cmのペーパーポット「No.15-7.5H」(日本甜菜製糖株式会社)を用いて育苗した苗を用いた。
- (2) 若苗定植は草勢が強くなりやすいことから、過湿になりやすい圃場や土壌養分が過剰集積した圃場は避けるとともに、定植時および生育初期には、圃場の土壌水分が低く維持されるように留意する(測定深20cmでpF2.7以上)。但し、高温等によりトマトに萎れが見られる場合は、適宜株元かん水を行う。
- (3) 主枝2段摘心側枝1本仕立ては、主枝第2花房の着果を確認後、主枝を第3花房下で摘心し、主枝の第1花房下から発生した側枝を誘引していく方法である。強い草勢を抑制し、安定化させるのに効果的な仕立て法である。
- (4) 本成果により、総商品果収量で800kg/a、うち9月以降収量で500kg/a程度を見込むことができる。慣行作型では、総商品果収量1,000kg/a、9月以降収量290kg/a程度(岩手県生産技術体系トマトハウス夏秋栽培(4月中旬定植)より)であることから、秋期の出荷量向上が期待できる。

4 成果の活用方法等

(1) 適用地帯又は対象者等

県内全域のトマト栽培指導者

(2) 期待する活用効果

作型を組み合わせたトマト生産が可能となり、9月以降の出荷量が増加する。

5 当該事項に係る試験研究課題

(H20-04) トマト抑制作型における省力栽培技術の開発

(2000) 省力栽培技術の開発(H21~22、県単)

6 研究担当者

高橋拓也

7 参考資料・文献

- (1) 平成20~22年度岩手県農業研究センター野菜試験成績書(未定稿)
- (2) 平成11年度研究成果「雨よけトマトのセル苗直接定植における仕立法」
- (3) 平成21年度研究成果「ペーパーポット育苗におけるトマトのかん水方法」

8 試験成績の概要（具体的なデータ）

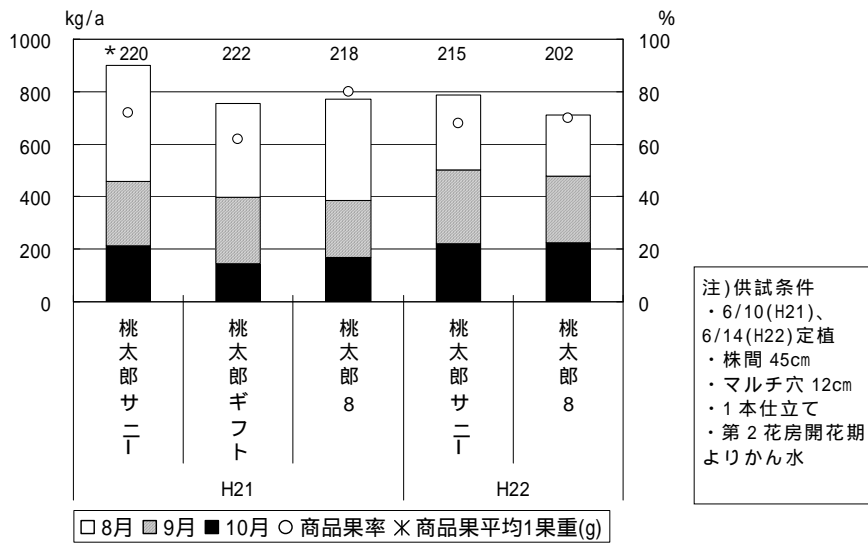


図1 時期別商品果収量 (kg/a) および商品果率 (個数%), 商品果平均1果重 (g) の品種間差異 (H21、22)

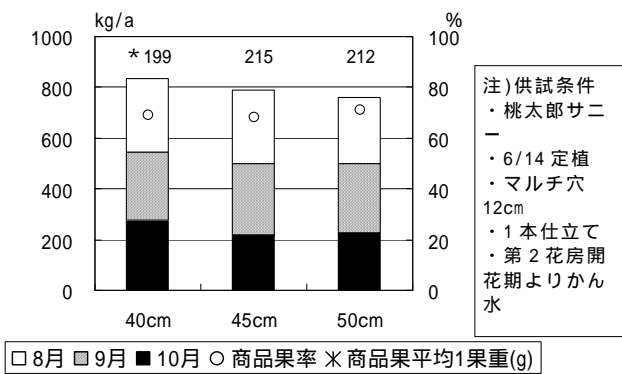


図2 株間が商品果収量に与える影響 (H22)

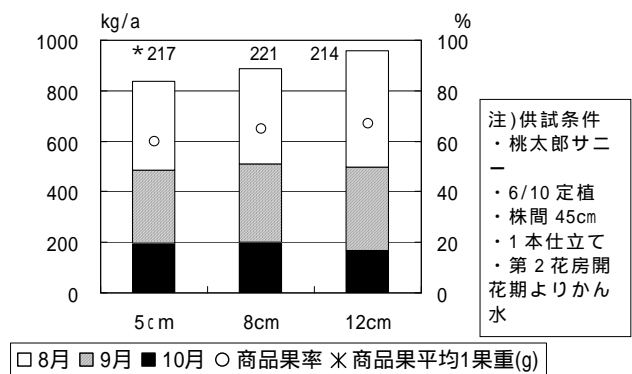


図3 マルチ穴の大きさが商品果収量に与える影響 (H22)

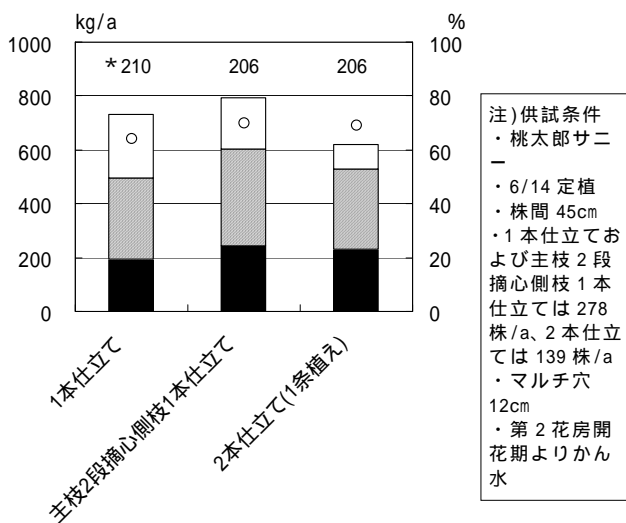


図4 仕立て方法が商品果収量に与える影響 (H22)

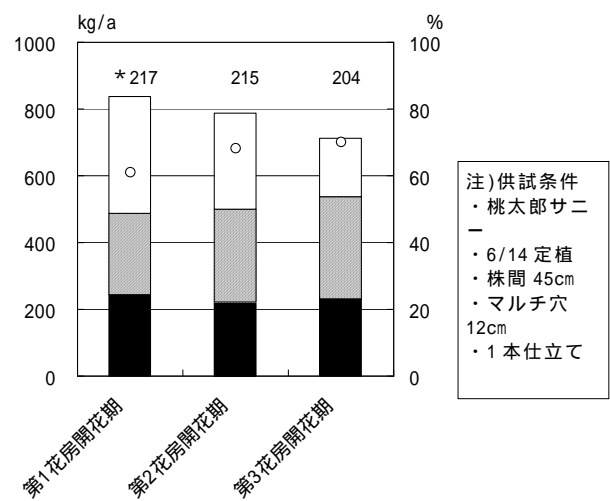


図5 かん水開始時期が商品果収量に与える影響 (H22)